

本日の学び テーマ:「苦しみを共にできる喜び」 テキスト:フィリピ4章2節-20節

【理解の手がかりとして】

このフィリピ書は獄中からの手紙であると説明してきたが、この書には、投獄の辛さに対する恨み節ではなく、信仰による喜びとか、教会の交わりの尊さとか、人生の究極の目標などについて、パウロの信仰者としての境地がなみなみと語られている。

本課の箇所の中段に「終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。」(4:8)とあるが、ここにイエス様の救いを受けて、神の子とされたキリスト者たちが、その人生をどのように生きていくべきなのか語られている。

「すべて、すべて、すべて・・・」、そう、つまりは「あらゆること、あらゆる状況、あらゆる時」に、私たちの人生時間のすべてにおいて良いものを追い求めなさい、ということ。なぜなら、それが神の子、神の似姿としての人間の生き方だからである。

パウロはこうも言う。「わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます」(4:9)と。私たちはこうして日々御言葉に触れ、そして学んでいる。その教えを実行すること、そこに平和の神の臨在があるのだ、とパウロは言う。

前後したが、前段部分(2-7節)を見てみよう。ここに二人の婦人の名前(エポディアとシンティケ)が出てくる。この二人は「福音のためにわたし(パウロ)と共に戦ってくれた」(4:3)人たちである。ただこの二人が互いに仲たがいをしていたようで、それは2節の「同じ思いを抱きなさい」(4:2)という言葉から分かる。

ここに突然語られる教会内の人間同士の仲たがい、それはこの私たちの信仰生活の中に残念ながら起こり得ること。お互いに言いたいことがあり、考えが違うために生じる衝突、これもまた決して見過ごしてはならない重要な問題であるからパウロは手紙の終りに記したのであろう。御言葉の生活への適用(良いものを追い求める)、そのことが、ここでもより具体的に語られている。

私たちは、日々の関係において、自分の正しさばかりを主張するわけにはいかない。8節には「すべて正しいこと(を心に留めなさい)」と奨められているが、それは自分の正しさではなく、「神の正しさ」である。「そちらが下がるべき」との一方通行同士では解決の道はない。4節で「主において常に喜びなさい」とあるように、主の方向に心を向け直すこと、それが私たちの関係が「平和」に成っていく秘訣であろう。

2節の「勧める」という言葉は、聖書の中ではしばしば「慰める」という意味に使われる言葉。ローマ書12章1節にもこうある。「兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます」と・・・言うなれば、私たちは互に向かい合う時、神の憐れみに立って向かい合うべきだということ。誰一人完璧な者はいない。誰も神様みたいに相手を諭すことが出来る人などいない。ただ自分も神から赦されている人間である、そして相手もまたそうである、そのところに立ち続けることによって、そういう謙遜さの中から相手と向かい合っていくところに、本当の対話は成り立つのではないかと思う。

「真実の協力者」(4:3) という語についても注目。「協力者」という言葉は「くびきを一緒にする人」という意味。くびきにつながるということは、決して人事のように傍観者であることではない。真実の協力者とは、それほどまでに相手の事柄を自分のこととして背負って行く人のこと。この「真実の協力者」という言葉が固有名詞ではないことは意味深い。なぜなら、私たち自身に語られた言葉として聴くことができるから。パウロが「あなたにもお願いします」(4:3) と言っている「あなた」とは、まさに私たち一人一人のこととして呼びかけられているように感じる。

「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」(4:4) とパウロは勧める。パウロの願いは「主にあって共にあずかる喜び」が教会に充滿すること。それは「広い心」で「思い煩い」をやめて、「何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ」、「求めているものを神に打ち明ける」(神に解決を求める) ことである。そうして教会(一人ひとりの心と考え)は神の平和で守られるのである。

さて、10節以下の部分において、パウロはフィリピの信徒からの贈りものに対する感謝を表す。パウロは自分が十分に満ち足りていることを語る(4:11-13)。しかしその満足は物品によるもの(肉的な必要の満ち)というより、それを贈ってパウロ(その働き)を助けようとする信仰に向けられたものと思う。パウロは決して「贈り物を当てに」(4:17) したのではなく、そのことによってフィリピの信徒たちが「(彼らの) 益となる豊かな実」(同) を結び、「香ばしい香り」「神が喜んで受けてくださるいけにえ」(4:18) となる、という信徒訓練であろうと思う。

このことは、先に述べたことと響き合う。それは「主にあって共にあずかる喜び」が教会に充滿すること。「広い心」で「思い煩い」をやめて、「何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげる」、ことである。そうして教会(一人ひとりの心と考え)は天に宝を積むことができるのである。——「富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が恐び込むこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」(マタイ6:20-21)

(聖書教育より)

「私たちが共にキリストを証していくには、何を、どのように役割分担しながらやっていけるか、考えてみましょう。」(大人クラス)